



南總里見八犬傳第四輯卷之五

第三十九回

二箱は飲めて良傳夫妻を葬る
一葉を浮れて壯士両友を送る

文明十年戊戌の夏六月廿三日の朝、朱明は犬塚犬飼の両義士、大照文
小と俱は犬田小文吾を自送り、門の戸やと引、圖々舊の席は團坐し、
あつ亡骸を隠さんとして泣沈し、妙真を解つるなり、業内にて辛く、納戸
より、あつる高箇の葛籠は山林夫婦の骸を精悍く、飲め、表を葬る
包を船荷の程、造る程、大法師と照文は江橋のほとり、あつて文五共衛
舩艫を竊は背戸川へ漕、あつる霧あけ、あつる又彼五六鹹西郎ホ
三個の悪棍の亡骸は信乃と現は、背戸の河原へ扛りて、あつる腰は鏝の石を

附く水底深く沈るよ大へこれ中も回向して頓生菩提と念はれ入る
有繫は不便はあはれ共念佛をうくる程は必す輝き
整ひて天の暗うし進退既便宜をゆる入江橋のほとり成兵絶て
大八の親兵衛を抱ひて葛菴は添へて船は来る信乃現八も乗りと
板子の下は伏して下當下蜚崎照文は簑笠は姿を窺へて竊は船と
漕ぎせ大八も下りぬ時河原は目送るは送る其処も見えぬ
方よ是義士節婦を皇天憐れむいん露のひめく立籠る咫尺の間
定うね彼帆大夫が遠見の兵が退くをうとものつてこれとあはれ
船路は障るうなく海上遙は走る程は露收りく日ハ暮る。それバとあ
照文の楫より迷ふくもわづら素より安房人なり水とて陸より易う

市川の郷をく吾侪の家へ彼処と妙真が指すあはれ船門
邊は著まける倅の便宜は是のなる大江屋の篙工們はあはれ速く船を
出く昨夕より一人も在る番守耳のひ疎く只炊とほる婆々のこれバ
信乃現八後やけく照文とて河岸は登り妙真と先は平々と極ふ
代る両箇の葛菴とて母屋に運び入れて家廟の門より居る客
あはれ慰めりく一嘆息をうくるあはれも妙真ハ心もあはれか
子子の義烈は羞るけん復うしつに面色は奥の一室の塵も拂て
信乃現八とこの処は潜し照文も茶を勧め膳を薦めど一餐の志の噂
又暇ある折はあはれ家廟は對ひて香を焼た花と齊照て子と息婦の
後世を吊る看経の外他もあはれ忘れんは生憎その面影の目見えく
いしもの胸ののちひあはれ禁りて落る涙の玉匣へ親あはれなれどと

あやあや、推見、母と慕ふて大人しく或いは出門は立、獨遊、餘念、
鳩の車は竹馬より走り疲れ、假寐の裾に衣添ふもの、
遅く、生月も今茲も木は遙か土用、
乳房と探るも哀れなり、
あり来より妙真、
ホハ、
密に、
折戸を、
帆大夫、
側は坐り、

豫、
旅客を、
彼と、
さう、
まゝ、
酒食と、
僕、
あ、
あれ、
終、
包、

忽地横を破と拍く感をもと半响許満面は笑を含み某を招き近付
小文吾微妙に動かしめ分るくわぬ信乃が首級を進りしに文五兵衛ハ
料を免して汝と共に宿所は還さんれも亦遅いあさ一速は辭我にかへて
直に趣をまゐらげば怠慢の罪をゆぐべしと人を走りて成兵を退せし
餘のうら云云とち案しつ檀内はあちをぬきせし程は露齋と見外す
六帆大夫は促装して首桶を携夥兵を揃く遠くかへり去りぬ父の死を
相伴る入江は還るは極權謀をもとめぬ身傳の釋をを歡ぶ氣色も
わく却まらうみ只る習中さそを推量れども路次めあれば告ふ由りにて
宿所かへり着るは大道徳は迎れにみ子舎は圓居しと身かひの事の趣
房ハ義烈沼蘭が枉死及某血の奇特はあり大塚生の難瘡平愈大ハの
親兵衛が玉の瘡の念玉親得而修験の本名本心迷わくは父は報ふ大

道德も人々を船を東へ駕と犯し市川へ遣しとるのすと告め父つと
ゆく毎上りふ驚かし又下りふ感し且歎く涙を袖に堰くひて膝は
流れてゆく水のうへを流るを今有繋は花の心弱くを今此の役は立ちこ
ければ汝ハ道德は俱してと市川へ赴き妙真ある力を勸ね房ハ沼蘭ハ
野邊送り今宵をあらんぞん葬ある果が汝ハ彼両友を潜りし船小
乗し大塚まで送りしれ共侶を受ふ婢兒們ハのあざけりや
彼ハハ之り来し親子齊一の守の程を問ひし中且愁む彼極を
えん衣を増し家廟は櫓を折添く看經しとわんを老人ゆ
相心しと汝ハあづと問はくしとを親の意は仕り彼此は
如き保る物大く洗ひ流し道德は俱して来れしとる緊略を報ふ
ければ人々感嘆せざるも就中信乃現ハ文五兵衛が無異を祝し小文吾を

方々の大々々々々言葉の末も山林夫婦が死を惜むるを深かり。目く妙真の涕らわを小膝を進め喃犬田ぬ。かくいふ子の志竟空。く輒く追捕の人を欺けぬれば亡魂のをも歡く。ひひんく高工。小文吾點頭。己もさをもあられ大塚生の急難の一旦。釋れ。あ。又。小文吾點頭。己もさをもあられ大塚生の急難の一旦。釋れ。あ。辭我へ遠くもあ。孫八沼蘭が死。さをも且く人あ。さ。四鄰の人の。同。沼蘭へ聊故あり。行徳へ遣。さ。所要あり。熊倉へ赴。り。と。答。あ。月も終。なり。り。この宵蘭を究竟。中。頃。如此。こと。い。合。時刻。と。ま。大法師。七。骸。と。飲。葛菴。の。を。退。り。潜。り。を。問。を。枕。念。仏。も。夢。の。世。や。彼。郎。郎。の。あ。れ。け。は。母。が。あ。つ。焚。き。出。立。の。飯。も。逆。縁。の。涙。を。鍋。に。落。味。噌。妹。え。伏。花。開。を。縁。に。薄。さ。実。を。汁。を。せ。

又阿弥陀佛。弥陀仏々々々々念。れ。初。夜。過。き。寺。の。鐘。も。無。常。と。流。轉。の。巷。煩。惱。の。狗。の。声。も。更。も。主。死。の。海。近。な。れ。彼。岸。より。波。の。音。あ。返。り。呼。吸。の。徂。徠。の。人。の。迹。絶。く。既。時。刻。は。あ。の。く。さ。支。度。を。は。房。八。沼。蘭。が。亡。骸。と。飲。や。る。兩。箇。の。葛。菴。小。文。吾。と。現。八。背。負。く。不。被。整。を。携。う。大。八。の。親。兵。衛。の。時。は。熟。睡。を。信。乃。が。横。身。に。扛。抱。た。墓。所。を。供。は。幸。々。と。照。文。八。像。で。准。備。せ。單。張。燈。を。引。提。え。先。進。め。大。則。導。師。と。西。箇。の。葛。菴。の。間。に。立。け。既。り。背。門。口。より。送。り。お。き。要。時。とも。難。々。妙。真。の。焼。け。を。送。り。只。ひ。り。端。店。に。携。え。柴。垣。の。神。は。涙。の。たま。ひ。川。線。球。数。は。唱。名。の。声。も。曇。る。宵。箇。の。天。斑。雜。を。星。影。も。定。り。あ。れ。世。の。哀。別。離。苦。堪。ぬ。炎。暑。の。六。月。も。今。宵。む。り。八。肌。寒。地。風。ハ。本。来。空。水。火。滅。ん。と。く。又。光。に。螢。火。と。ぞ。あ。張。燈。の。人。を。だ。あ。る。を。翹。ち。伸。あ。り。目。送。り。なり。る。程。は。人。々。を。

朝露碎
王豪傑
送り

大太師

大飼現八



蛭崎照文

大田小文吾

大江親兵衛



大塚信乃

阡陌を邁くと百歩許西へ入ると一町あり、陝小の岡あり、此の処昔より大江屋の
 墓所なりと小文吾のより知れば云々といひあつて、軼る葛菴を却て見れば現八も
 ぞと、却たる葛菴の上は附より一盤を西へ入るは、把る房八が親真兵衛が
 墓の側を壊し掘起すと七八尺も穿果より、當下信乃ハ推見を石の上へ
 居措く、両箇の葛菴を搦めば、小文吾現八諸より、く空を繰りあがり、
 夫婦を合葬する程は、大法師ハ空のほより近く合掌して、引導の語句を唱へて、
 諦聴諦聴四大水來空、美分、別泡沫與夢幻、妻子猶波
 器況珍寶乎、晴能隨汝者、儻不破壞一團心、識亦焉知
 寂滅之為至樂、頌曰、荷葉與花共浸影、漸瀝涼風蕭颯
 急催秋、其氣清冽、其色慘淡、涅槃室中、物僉休息、吁得
 時哉、吁得時哉、即投與以下火、最後之句子、作麼生看

破熱池中並頭蓮、分明紅爐上一點雪、喝
 唱うて退くと、小文吾と現八再び盤をとり揚る立地は、理められ、信乃ハ
 と大死の石をとり來る推を、左右の梅の枝を伏せ、阿伽と沃き、莽草を
 挿と大八の親兵衛と第一番は、推向て頭より、く額つて、次は小文吾、次は
 信乃、次は現八、次は照文、次第は焼香、回向する、この時、親見ハ全く睡の覺は
 けん、と訝しげに左見右見る、細小なる、さうち合して廻らぬ舌は、念仏の南無と
 なる、彌陀頼む人、の所作を痛む、これに、彼を、あつて、人々嘆息せむ、
 中、叔父を、あつて、又稚児を携へ、食大屋へ、來り、来り、背門より入る、
 程、後方遙に、撞り、鯨音ハ四更なり、妙真、多く出迎へ、人々を、あつて、盆は
 茶碗を、並居て、準備の煎茶を、薦き、小文吾ハ墓所の、埋葬の、為体と云ふと
 妙真、これぞ、あつて、子ハ、さう、媳婦は、彼瀬は、たゞ、義の、為は

其命を預る世の雋傑達は極を送らうやんや況祖父松平の王なり
師ありと云えたる金碗大入の手はあゝ其道德より導せられ五山の衆徒を全
聚して経痛せしむるに優べく千萬人の道俗は棺の繩を曳きしより渠が爲る面目
あり亦これのありや中へ尚仆く孤を孫と云ひ捨てられど何ぞや歎きけりやと
ひびくも又ち歎く袖は寅縁の推見と云ふと臥房は伴へば萌葱の褥の七布八布
廣は今ハ化野の中は捨る撫子の軀と雖も良れはかそ又妙真ハ舊の処はせ
すの故遣火焼く官待小文吾これをえんや其家は甲夜やいひてくあり
辭我へ遠くもわぬ斯くも揃を坐ん人老其曉ゆく大塚大飼両友と船を
大塚へ送るこのやうな父も豫くあるとゆさうありや商量決着をな
心急だのさうさうと云ふ妙真も寄るも名残を惜み切く初七日の比ま
留るもくもさる筋なれどもさうさうと夜は深なるは明果るまで殘る
相譚更に慰れ信乃ハ現ハ共侶は妙真さうに對ひて此度某もやうく今
息賢母も稟る恩義ハ今さうに演盡さるるは其後難と憚りく小意を
故郷へ赴けども其故ある伯母夫許す此の身と寓難より同盟の犬土大川
莊助一字と額藏と呼ぶものは潜るは對面して人々の人を告ぐとの餘の
所要も果さるゝとある外他さうやかれは所不定の身一旦袂を分つとも
あゝも実生の犬土あり鄰郷は父田父子ありあゝ疎遠さるゝもあゝ嫡孫の
爲自愛しく哀戚を於けられしを再會の時を心緒と盡さる
と告ぐ列は妙真ハ心はけよと云ふ要時頭を擧ぐるも當下嶺崎照六
懷より準備の沙金を五包と云ふ先三包を扇を束さるる信乃現ハ小文吾
もはより近くも寄る三犬士の金ハ三兩と一包と有り此些少の東西あれも
此度の路費を資するものも私の餞別なり里見殿の賜あり辭は納めんと

將諾ハ違ふべし然レトモ空ニ帰國シ云云ト云々
奇情の小兒とこの市中や育ち安房の藩中や人とかれとこの子のあはれ
可兒謙退辞讓も更なるべし
と急ぐやぬふ安心の爲告るものとバ亦大法師も共侶を辭と盡て
懇々勸めり文五兵衛ちやう寔は怪兒因縁や拙郎小文吾亦は
物教やぬ孫さ大諸族は微きやあはれ幸はとぬれ孫大の親兵衛
丈夫と云々四大吉先く何ぞ微志を免れ勿論の事や渠は東西
進むやぬ又唯推辭ももあはれ退くや無慾のめ進退は某と
いふはなぬ小兒やと今四大吉の名代は殿の見参入れとくこの心
進むやぬ又唯推辭ももあはれ退くや無慾のめ進退は某と

いふハせん妙真ふ点頭バども仕らんとふひふも渠ハ二親を喪くやぬいづの
日子を往む候七歳未滿と此の慎みんと初七日を迎ふに小文吾もあはれ
又これ彼と商量しと見首は後志なれ大塚生の厄難の既や釋され世
憚の候もやあはれぬ又行徳へ來ぬや素人宿ハ丁寧れども心
かたのもどわん客店の里造作やぬれおも二つの隨意逗留あはれ他
かくいふ人の城は、大照文ハ秋びく送はるゝ慰めやかくてこの日文五兵衛ハ照文と
相伴く行徳へぬり去りしれや、大と照文と或ハ二日或ハ三日送代は市川と行徳小
宿や四五日を送る程は房ハ沼藩ハ初七日はぬあはれども小文吾ハ大塚あり
早さるゝ文五兵衛ハ朝ありき、竊は追薦の法筵を資れば大ハ連夜も続
經つ照文ハ正首は俱は席まつりや、そのかた迹を吊ひたりとくは程は秋の
初風を吹く外の夏越の幣やも流れて河岸はあはれども小文吾ハ立ちあはれ

文五兵衛も妙真もいづれ心づかりて大照文も相憐れり時七月端の二日大を
 きのより行徳あり朝起て文五兵衛はあづきとて思惟ふ大照文は美
 りとて必故あそびて信乃は定う告ぐもその伯母も伯母夫も甥を亡しんと
 謀むに彼村雨の力を奪ひて謀我へ遣ふもわかれあれらの嫌疑あはれを
 信乃は故郷へ赴けり伯母夫許身を寓ぐ云云といひもその親族は憑りぬ彼を
 亦犬塚が久恋の地はあはれ只その友と貞實の婦はさう人の心を報をさひ
 のちうんは送りぬや小文吾をけふまゝかへぬ其処は不測の事あはれを
 むんより負道彼地は赴んや犬塚大飼飼ホが旅宿を何処とあはれと大塚の庄官
 墓六小廬を額藏の庄助を竊訪立地との消息をひては從れのあ
 めども房夫婦の初七を果さば犬塚は赴けり彼犬川庄助は潜るゝ對面とさ
 年来の行脚の趣意を告ぐ里見殿の家臣も死契約をせんとさへ今あり

邁る翌の夜小文吾をけふまゝかへぬ其処は不測の事あはれを
 刑談は程はしり市川が横崎照文もあはれ船へ前室は迎入れて大法師共保
 件の趣を告ぐ大照文も亦法に法師彼地は赴けりこれより便宜に基
 今朝もすもものもとて相憐れり親共衛二親の初七日も果
 今果てかくあはれを安房へ候えりと折妙真も勧めて涙もや
 やる引く折小文吾のあそびて孫の二條を事整ふを法師は秋暑
 厭ふ彼地へ邁んといひて日よの鬱胸を印くは足れり秋べりと只官
 稱賛をうるかく文五兵衛は外より便船を求る味のは出船ありと
 大照文は酒食を羞めく款待を程もめその時刻ありと大行装を
 整へて遠くへあはれ文五兵衛も照文も後は跟先を立入江の船場を送り
 是の波もかへ日と翌と哭りて秋をさあぬかへり大照文は是の趣を

妙真も報ん之文五兵衛は辞別れり亦市川へ還り鳴呼趣舎の不定なる
辞逆期をくば値遇も時あり別離も時ありあてハ別とされハ遭ふ現風雲の
たゞまハ親串着愛前諾後信料りくハ世間を急ぐ離合と聚散あり。

第四十回

密葬と詰る暴風妙真を挑む
雲霧を起して神靈小兒と奪ふ

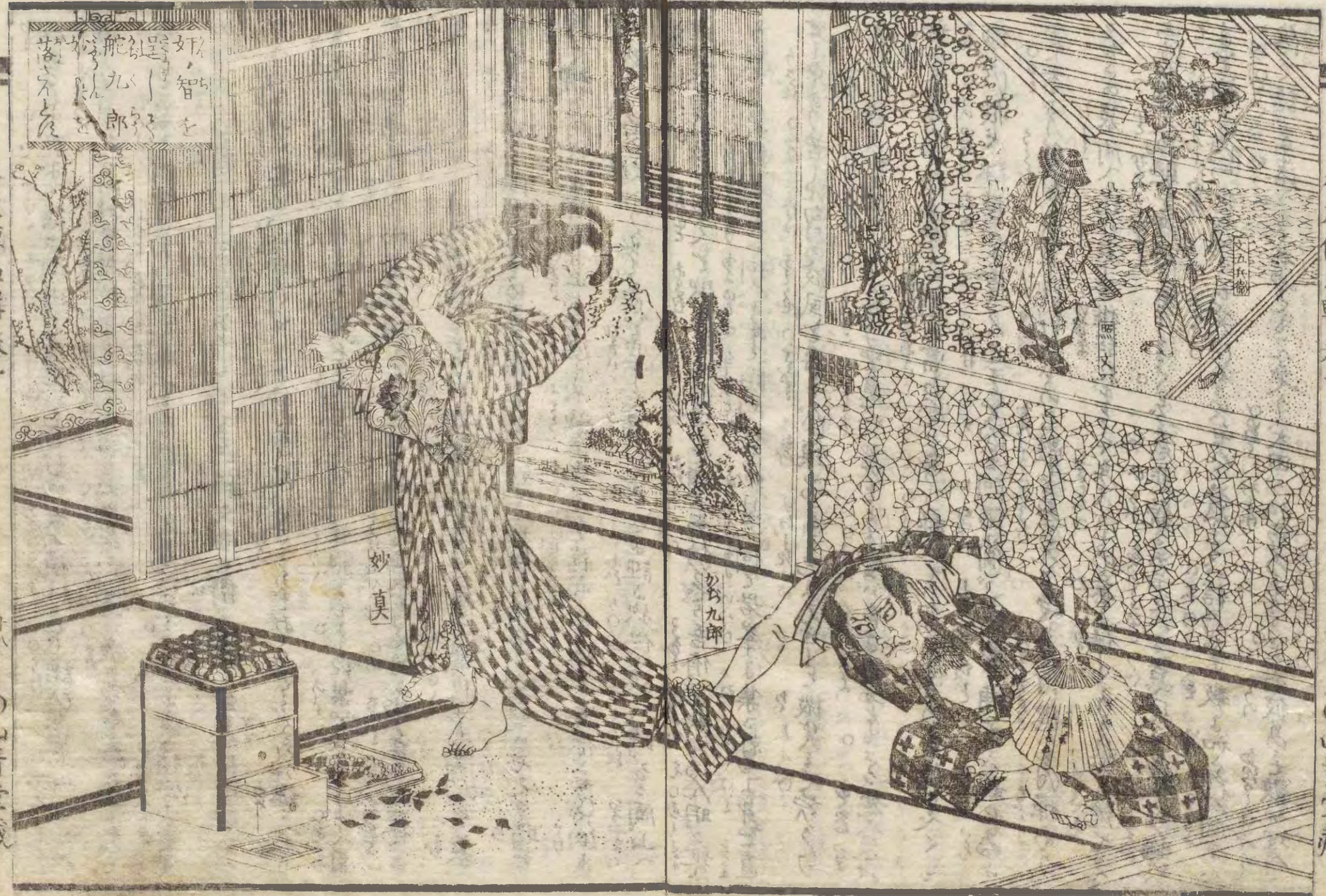
大が武藏の大塚へ赴き又三日をりて経るこれ亦信やあ次の
旦照又ハあひの妙真のあ小文吾が還らぬ彼処の友は留られてあはも
日を強うとあはれあふれと翌六必と契りける彼法師より約束は二日後ハ
いれどあはれあふれ心より昨夕更蘭く占那屋あで還り飲られ行
徳へ邁る人いあふれ来はといハ文五兵衛と相譚く又彼地まで赴かハ
何をそかきく疑ひを解くやわんやよりてあふれ告ふかといハ妙真

嘆息く現宣はるぞ胸あふぬすより小文吾そも言を食むあふぬ
道德も何くもあふれとあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
赴かぬあふれあふれ速くあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
増んのもあふれあふれ便の有無を問やあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
一人信のかれとあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
かぞへ程は妙真ハあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
二七日は當るを今朝ハ生平ありあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
正午よりあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
かぞへ又あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
膳むあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

木魚の音も時を知らず他間へ積り功徳高き山の石を打たれり未だ此秋
横日影背門の槐は秋蟬のありて戸を暑くする活処は秋高く阿懐久しう値
ふれと呼びけり背門より来るあり妙真誰と志す木魚を遣り珠数を收め
舟を起さんとする程はあわねえ縁頼る實戸は會釋もあらずとけり走り
破と推開くと驚かぬええれは人の此年の齡五十七なりやと人眼圓く鼻大く
頬骨高く唇厚く板齒一枚脱ぎと臘石をく補ふなり皮膚ハ赤黒なりと
秋茄子の如く髪鬚ハ半白く老冬瓜に似り黄庚木鼈の單衣ハ肩と腰と
汗濡る申の時よりなりと積鼻禪の花より花とこれなりと頭より片
端打せし裾も下さば四空柱は身を倚り己が隨ひ高胡床近辺の團扇を
ふた抱きより揚ぐ衣領と推披き暑しくとうの扇げに戦く胸毛の熊か
似く花繡は月輪状金と書し瘦肩は掛るも拭左はは獲て臆の下にお
流る汗を頭擦けり拭ひよりあは是土地は名々暴風の舵九郎と云れ
る宿も定めぬ彼此は身を備へて船を漕げと酒と賭博とあは耽る湯計の癖者
あどあたる裏まこの大江屋も高工の冬に折れし備へて船を遣せし船
荷を船艙減せしありぬ風吹ありし八房ハどうの腹をたたく罵り懲りし
介後ハ寄つけざりし今ゆかり事なれば妙真ハあはれにがをて是よりぬ
面色して背門より輿を進くと呼門ありて来る人ハ誰あるかと訝りけり
居起す途を断られし舵九郎とありてさへさへ風は吹れてあはれ訪れしと
中んと寤れし此も羞れしと懺悔ありて銭がたれ酒落しき濱邊の貝子
劣れども風は吹れくるありあはれ波は接れり寄るありあはれぬ日殿計の奴原が
媚を説告ありんあはの哥々罵られし安否も問はれりありとをたれ
てあはれ奮然刺さる今ゆかり事なれば妙真ハあはれにがをて是よりぬ

けふ訪人異邁人とあひて人まづけ、哥々、餘倉へ赴け、いづれ月より今は還る。
娘、御い里返れ、といふべく解せぬ、故あるのやと又他の病氣を
頭痛、患ひ、とある、案は、灰、とあり、又、とあり、とあり、是れ
勘て附く、れ、あ、近属法師と武士と、或、宿、或、二宿、送代、逗留、これ
や、云と疾視、眼、違、れ、人の誤訴を、とある、時、を、馴、染、せ
れ、同、状、に、阿、懐、の、返、答、す、み、や、み、や、仇、や、み、や、と、程、よ、く、八、圖、宅、の
嵩、工、們、も、出、舟、は、就、く、み、か、在、る、彼、客、も、如、く、や、れ、と、告、る、あ、あ、ハ
氣、の、毒、あ、推、掛、相、談、人、は、ま、ま、ま、ま、背、門、に、入、佛、ふ、故、り、來、歷、序、詞、を
ま、か、の、如、後、段、は、い、く、長、う、う、間、近、く、あ、り、く、は、又、同、へ、な、る、あ、あ、の、を
あ、く、と、押、と、あ、は、席、薦、敲、き、招、く、言、葉、の、端、も、伎、倆、あ、る、と、猜、さ、妙、真、ハ
ち、騷、く、習、を、鎮、り、す、て、い、づ、油、斷、を、と、く、心、づ、れ、る、志、ハ、大、き、な、れ、

は、い、く、疑、之、の、筋、か、ん、や、房、ハ、鎌、倉、へ、赴、け、ハ、人、み、か、れ、り、沼、蒲、を、行、徳、へ
遣、せ、ハ、初、媒、介、せ、れ、人、の、去、歲、の、秋、身、あ、る、と、今、茲、ハ、又、の、後、家、と、の、長、病、
著、取、と、告、れ、と、い、く、も、措、れ、と、看、と、見、と、見、と、彼、と、と、遣、れ、
又、彼、兩、個、の、旅、人、ハ、原、古、那、屋、の、客、か、れ、と、又、房、ハ、も、疎、く、後、渠、が、還、る、を、
あ、く、あ、へ、も、あ、ひ、道、遠、と、れ、日、の、暮、て、ハ、ま、遅、き、折、に、宿、を、と、れ、あ、り、
や、へ、と、い、せ、も、果、に、膝、突、詰、と、否、宣、あ、か、還、る、あ、情、由、ハ、大、抵、猜、し、り、と、又、あり
と、先、脱、る、檜、垣、の、姫、が、姉、も、あ、り、と、四、十、あ、り、と、と、も、根、の、縛、致、の、捷、
と、い、く、あ、り、と、脱、と、み、ぐ、と、久、米、の、仙、人、ハ、圖、窺、と、く、と、雲、の、歩、板、と、踏、け、と、勿、地、
浴、人、女、房、に、せ、う、と、年、來、寡、居、の、枕、寂、く、不、圖、せ、る、あ、り、と、心、と、も、く、惑、い、海、に、
何、が、寺、の、色、界、杖、尚、或、ハ、連、歌、ハ、香、立、花、の、蹟、美、更、ハ、趣、あ、る、銳、ハ、武、士、の、浮、浪、人、個、
二、個、も、密、夫、の、や、と、い、く、澄、池、あり、色、ハ、惑、ハ、子、で、も、古、昔、物、結、と、め、と、不、便、



妙真
九郎
智
郎

妙真

勿九郎

文
九郎

大傳
車
卷

山
堂
藏

八
二
車
卷

十八

山
堂
藏

欲するとも肝は八幡の相撲あり恨を含む妹夫は頼れしや諾ひし件のついで
連り六月廿二日の鎌倉某崎より山林が大田と出會の門擇ハ誰とあるぬのてかし
余を云云といひつゝ一言の後先取次あるの偽りあるはれのとれより猪ひふ文書
あの哥々を殺して逐電せしあはれかそこの親文吾共衛は竊は金と和解れん
身ハふ子の亡骸を阿容くくく人むあせば葬らるあらんぞんれ想ふべし
女ありて明日より月大のみを夫とて替り替飽きあはれ樂とせくく人目
さうさの念佛三昧も柳の咲は論より燈は彼新墓を費せし目物を見んと立揚ふ
裳を楚とく由く且侯きつてあり彼新塚ハ誰なりともの職役はあはれと墓
所を費する不法か人その子預とてあはれも捨て措けしとあはれさす晴と
睨く糾きの役なりけしと正しく過し不敵の悪事と莊官殿はけく賞祿を酒
の飲めは宝の山へ入りあはれとて空しく帰らんや送は誣る欺偽は一跨る岡山へ

引くもの行く面前は明々黎々を分てえん運の際を覺期をせよとさうり物
知しあはれが心むあはれなりけん仇もあんと嚮はひをあはれさすあはれ人日
つる地密夫と引へえさる再婚を招きしもの婿殿ハ外あり恥ぢあつこの鼻
○としわとと登る足錢をゆゑの健ゆく船ゆく漕ぐ小口も利く酒ハ喫ども睡
上戸あり物押ひをぬ柔和の女房の尻は布ハ敷け辛防つる六年の功龜の甲
あはれハ八卦むとときあ堤の賣トは生利とをせし女房を下置ぬと地天泰
ちく大吉なり身ハ些劣れども里や友達夥あり山林が養父とあはれとあはれ
けりあはれあはれ今立地は絶更さるの商量は乗らんとかハ竊は岡へ埋やる
あはれこれ
あはれハ堆おもあれ人あはれさるあはれは力ハ引受く一代の守本尊はあはれ
さうんやととハ冥罰觀面莊官殿はけく守へ牽く密夫共侶獄舎は變
いぢや否とも応ともいふあはれを引く袖を拂へども又あはれさる年ハ似け

〇今宵の船は乗走りか翌ハ早旦と大塚へ到れんと易くべし。この條の
 趣とて大に哭き報知してゐる文進退便宜をぬき八皆伴ゆく安房へ來り老母ハ
 あつた起りの準備をも急ぐ送る示し合ひれば文五兵衛感佩とこの
 後寔は然る一宵の仲親共衛と妙真之相伴ある猛のやう徒者等ハ
 某ハ孫と背負く郡堀まで送りや阿懐は急ぎも慌く物を取遣はせ
 と心をつらば妙真も遂なる後には睡覚る推兒は新衣被せ更く
 獲身袋と終は腰は楚と著る多う多う衣を脱ぎ替へて寝装を
 整て貯祿の沙金をどハ財布の終は身は著て家廟の位牌古記舊録孫ハ
 被替の衣をも遠くとり集めて下祓は包まり照文ハ水行と便する
 又とも順風なり心は任せ只共走りは走えとつづかれ彼と急に程は
 きふ江戸まで船をかせ依介とあみ小厮の只一個かり其の妙真が膝
 促装をもとくあつた地へ邁せると訝けは客を妙真ハ曲は報じの
 蚤崎河が大八と云云の処までおくとんと宣ふ釋はめをうち任せてさう
 遣ふくわだ行徳の外祖とあつた途で背負さんといふ人いそぎを
 どもわたりとあつた吾侍も共侶中とあり徒者あつたとつた今還り来し
 めのともし遺つた心は似れど些の祓包ありとあつたをもちゆりゆり
 依介一残は及びぞとをいと易にさあつた一日船を漕走らせ足疲すと
 かたは今かへりといふ何うあん何処でも俱く是と快く諾む心ざめの淳朴
 主のゑな勞を厭む他し高工ホとあつたねばさう件の祓包と中結と
 負ふ草鞋の紐を締む文五兵衛ハ大八の親共衛を背負ひぬ
 宙守や彼耳疎に老婆を迷せし有繫は名残ハ惜しく笠は杖とあつた
 あつた支度や整へ無文を先立金共侶は背門よりあつた面を

ついでとて笠を傾け、間道より進む程は落日暉々として野禽飛べと急こ
袂は留る風、昼の秋暑は似てゐるが、急ぐと足弱の動もれば後を
待つて又走る市川の町を離れて田舎路の上總のへ並松原を走るれば
処々延繋る茅萱の下は集く虫の音も暮初く日没よりなり
浩処は前面より叢松蔭より顯れ、一個の癖者頭は拭の糾鉢巻
と腰は二口の短刀を跨右は八九尺の長權を挟みて柳色保の筒腰被の丹藏
煩ある諸角但る單衣の面袖と前より綿毛も陽著は衣の衿と片端
折せ、彫剝の打扮髪は皓く面は赤淫め、山嶽の暴る骨を太く
膚は黒斑め、周西の祟るは似く大道と陝と立塞と、是れは別人か
怒れば舟を覆し又屋を倒し、現暴風の名の如く、舵九郎を有る
當下暴風舵九郎は持る權を取直して横へつ又推立く酒氣分る

声高き、舟に賊奴輩遅る、汝も既に悪事の嵐房を、是れは現まれ詰
られ、後家共侶は逐電、汝はかくと猜せ、計の甲乙馳催して門のハ
狗を附お、途お視法師と立置て夜行をける路脈をこの海道と襲著て
先へ輪く張る綱は宿栖迷ひの旅鳥捕へ、絞る隙費は脱れ、と
観念し、女を速とて、死の逃とて、追ふ人々と、何句も喧嘩て疾視
る、照文これとて、先度懲ぬ不敵の悪棍、今苗の根を斬て、地方に
愚と何時、八除ん刀を穢を惜れ、望は任く先物見せんと、敦固猛く對ひ
進、刀を是りと引、技け、舵九郎は声より立ち、衆皆お、呼ぶ、あ、あ、あ、
左右、高萱の中小松の蔭より、或ハ三人、或ハ五人、折權大魚刀を引提る
夥の悪黨、簇々と、蜘蛛の如く、跡を、照文を、攬、竈く、懸、仆、んと、競、ハ、
と、照文ハ、些、擬、淺、と、前、後、左右、引、附、く、面、や、ハ、戦、や、う、その、間、は



閑東の格小
鬼と罵りて
餓鬼といふ
その食を求む
そのやむ時
おれあうく
なり。

おれバ坊主と陽射しを覗く横路を下町あり走る妙真も
稍身と起くわや追道と慕ふを船九郎ハええの朽樹の株は尻うち
うけく脇腹を抱き一稚児と弄玉のく投揚る地上へ墮ちる落せ息も絶
べく天叫ぶ声よりその薄月夜妙真ハ轉つ轉つ喘々近づく船九郎ハ
稚児と又引く動せ足奴且くこれと云ふ己があらは後をこの餓鬼ハ
今寂滅為樂又同行の三人ハ腹計の教輩は仕用い二人も活てハ之を
べく岡へ埋り死人の塚起り候も候もいふく今より一期を憑とわく
市川へ行く還るく今宵を二世のふく見あつた餓鬼も下ハ措を阿乳母
日傘で饅頭の皮を剥き榮曜の表盛否と云ふこの細鱗を肉齧めく
酒をもちんあつと決めく心をせよ心をせよハこの餓鬼と云ふ應の石を搔
合く胸前に振揚れば妙真ハ吐き吐きと云ふ目も眩るあつと叫ぶ

おれは声も禁んぬ腰は小草の上より身を投ぐ共死んと泣沈む
かゝ程は照文ハ廿餘名の悪黨を八方へ散散く文五兵衛共侶は妙真ハ往
方を索めく梢の処へまの折る雲間を漏る月影は過るれば妙真ハ
道次は伏せたり船九郎ハ推仰向る稚児を左より押へく右より石を投合の今や
打んと揚る兩人有一駭に怒るや等霎時と叫被つ僅に走り近づく
人保を取られ又つと云ふ見んや歯を切り鼻を捺りく瞬も疾現る
船九郎も亦これと云ふ頭を拳口を閑たく轉がらうあ笑ひ故小兩人あて
死せよ一歩も近づくこの石より餓鬼奴と單髻足奴ハ啼泣あつと云ふ
雲の天幕草木ハ藏棚かくる野曠地勾欄や看官も衆もいふ
うき事つと種々打挫ん欲せたり結果人欲望は仕せんといふや
飽あてあて弄べとも照文ハ文五兵衛も透わ親共衛を極めんとあめ

船九郎が
管絃と
をたのむ
神一犬
士を隠す

依女

昭文

妙真

又五郎

小次郎

大江親左衛門



用ひ言葉とあるへいひ合ふとも神の感応冥助と黙禱と怒を忍び心を苦
しめ立並ひ目成る間四五十歩は過るるも舵九郎は既に斯海嶽の残忍不敵の
奥を乗し早更撃つ又呵々と冷笑ひ揃ひまひり膏肓むは小面人ぞ死
ねば後家奴も珠敷と断くかん。さうバ餓鬼奴を料理せん巻の刃をさく足よこ
再び石をも揚ぎ妙真ハ只を抗ふと哭叫ぶ声龜悲一死危體
絶命照文も文五兵衛も今ハ忍ぶが忍れむ小兒を撃た答の大刀雙をのぞく
逃るは乾竹削はあふんは刀の鞘をもさく走り進んは程は舵九郎
會ふ石を閃く推兒の胸と壁と撃んは。あつども春狂る地上を
破る拍る且怪し目瞬く壺粉はわれ復ゆり揚る腕忽地麻痺これや
わが惘然る頂の上は駿驤と一衆の靄雲天引降る電光凄しく風亦
颯と音し事石を巻け沙と死く草木を靡るを鳴動も式ハ明く或ハ暗く

雲ハ衝々降る大ハの親兵衛と引包むをえさう。さあ中天へ登れが
舵九郎は復る驚に瞬る面を抗ふが雅児を遣うと跳ねる
撲地と轆轤は足はさうあふりて列ハ地とわれ雲の中は物ありと倒し引揚る
どく鮮血濃と雷りく舵九郎ハ腕より鳩尾の邊あぐむをえんと引裂れる
轆轤と落るけり。さう奇特は照文も文五兵衛も進むの忙然と後方より
嚮は逃る悪黨四五人。あつ朽れは。あつ船棹猶藻川鎌あつく志也
物と閃く不意は起る驟んと進むと照文も文五兵衛もえさく大刀真額も
後鬚一縦横無礙は砍立れは文五兵衛も相並る再び刃をうち振りて兩人
再び向敵を瞬間は砍し只残る奴原舌を掉く刃をまく逃るるを三度許
追捨て舊の処に立之れは風をさる雲霄へ傾沈む五日の月の影のと出で送りも

編述

曲亭馬琴稿本



淨書

千形仲道騰寫

繡像畫工

柳川重信



剞劂

中村喜作刊刻

家傳神女湯

婦人諸病の第一産前産後ちのそとふ妙あり又ふつとふとふといふも功あり

精製奇應丸

遠く〇大包三百粒餘代茶中包三六粒代茶五ト小包十粒代五ト

婦人つゝ丸

婦人月経不調の第一

熊膽黑九子

けいせいの正まあるをえうと製方秘傳の加けんをつくりをえうと熊胆

製藥并弘所

江戸元飯田町中坂下南側四方ふと店
神田明神下山本町筋同明所東町道

瀧澤氏



取次所 江戸芝神明前のつとま市多湯 〇大坂心保橋筋からお町南へ河内屋太助

大阪

河内屋喜兵衛

東京

須原屋茂兵衛

同

伊月屋善兵衛

同

山城屋佐兵衛

同

敦賀屋九兵衛

同

小林新兵衛

同

秋田屋太右門

同

九屋善七

同

河内屋茂兵衛

同

和泉屋市兵衛

同

河内屋和助

同

須原屋伊八

同

秋田屋市兵衛

同

出雲寺萬治郎

同

山雲寺文次郎

同

松屋喜兵衛

同

村上勘兵衛

同

近江屋半七

同

勝村治右衛門

同

長門屋龜七

同

杉本甚助

同

三家村佑半

名山閣

東京芝大神宮前書舗

和泉屋吉兵衛發售

